

特集Ⅰ 私が選んだ 日本映画歴代ベスト3

①東京物語	小津安二郎	1953年	5
②七人の侍	黒澤明	1954年	4
③浮雲	成瀬巳喜男	1955年	3
④生きる	黒澤明	1952年	2
④幕末太陽傳	川島雄三	1957年	2
④砂の器	野村芳太郎	1974年	2
④青春の殺人者	長谷川和彦	1976年	2
④ツイゴイネルワイゼン	鈴木清順	1980年	2
④百円の恋	武正晴	2014年	2

寄稿者18名、ベスト3（順不同）の中から最も多い票が5票の『東京物語』以下2票の『百円の恋』までピックアップした。

想定内と言えば、失礼にあたるが、やはり『東京物語』をトップに、ズバリ50年代の名作が上位を占めた。小津、黒澤、成瀬、川島たちの映画を凌駕する作品は、出てこないのだろうか？名匠たちの評価は個別のコメントにゆだねるとして、④になってやっと70年代以降の作品が顔を見せている。何と言っても、『青春の殺人者』の出現は、映画ファン

にとって衝撃的な出来事だった。あのころは、監督も、役者も、観客もみんな尖がっていた。また、『ツイゴイネルワイゼン』の封切りは東京の仮設ドームだった。それでも全国から映画狂たちが、ドームまで出掛けたものだ。（私もその一人）あのわけのわからない映画に対する、熱狂は何だったんだろう。あれから35年が経って『百円の恋』。スケールはぐっと小さくなったが、結局勝負どころは、どこまで人間が描けているか、ということだろう。



今回も、多くの皆さんに寄稿していただき、まずは、お礼を申し上げます。同時に、「3本に絞れ！とは酷だ」とか、「むしろ1本と言われた方が、覚悟が出来た」とか、様々な苦言をいただいた。編集部として大いに反省しながら、今後より多くの寄稿者に賛同していただける企画を考えていきたい。

伊藤英子 津市文化協会理事

井上静夫 同人誌主宰

①東京物語

小津安二郎 松竹 1953年

②ツイゴイナーワイゼン

鈴木清順 シネマ・プラセット 1980年

③そして父になる

是枝裕和 ギャガ 2013年

①ツイゴイナーワイゼン

鈴木清順 シネマ・プラセット 1980年

②ヴァイブレータ

廣木隆一 シネカノン 2003年

③無能の人

竹中直人 松竹富士 1991年

①1953年の作品は、日本がようやく復興をとげ高度成長期に向かう時代。

年齢を重ねてこの映画の良さがより解るようになり、尾道という舞台がわたしの両親を思い起こす。家族の在り方をしみじみと感じさせ、現代も課題となり色あせない。

②1980年の作品。題名と共に鮮やかに、そのシニールな画面が甦る。ざわざわと心揺さぶられる不思議な作品である。監督も最近亡くなったが、藤田敏八監督も俳優として、原田芳雄・大谷直子・大楠道代、一人ひとり存在感がある。

③2013年の作品。現代の家族・社会現象を語らせて追従を許さない。2004年第57回カンヌ国際映画祭で最年少の最優秀男優賞（柳楽優弥）『誰も知らない』以来その主題に注目して、是枝監督の作品は全て見てきた。『そして父になる』は、福山雅治が演技開眼したと思う。

日本映画ベスト3とくれば、小津・黒澤・溝口などに代表される黄金期の作品が入るのが当然かもしれないが、ここは敢えてそれ以外の作品でまとめてみた。

①は極彩色の映像の中に生と死、夢と現、過去と現在がごちゃ混ぜになって展開され、摩訶不思議な鈴木清順美学が炸裂する作品。静かなる狂気が妖しく全編を貫いている。

②は孤独な男と女が擦れ合い、軋み、再生するさまを繊細に描き、仏映画のようなタッチになっている。寺島のぶと大森南朋の演技はもちろん、映像と音楽もいい。

③はつげ義春ワールドをディテールに至るまでこだわりぬいた映画。がんばらない、がんばれない人におススメする味い深い作品。キャストイングにも注目。

この他、私的には、『眠り姫』（七里圭）、『カフカ・田舎医者』（山村浩二）、『Popun』（岩井俊二）なども好みである。

①『東京物語』

小津安二郎 松竹 1953年

②『晩春』

小津安二郎 松竹 1949年

③『麦秋』

小津安二郎 松竹 1951年

①『羅生門』

黒澤明 大映 1950年

②『パッチギ』

井筒和幸 シネカノン 2005年

③『秒速5センチメートル』

新海誠 コミックス・ウェーブ 2007年

①『東京物語』は、日本の平凡な一家の盛夏の出来事を通して、親子の問題、人生の無常、家族の崩壊という人間が避けることのできない運命を淡々と描いている小津監督の最高傑作。「映画史上最高の作品トップテン」において2012年に監督部門で1位。

②『晩春』は、野田高梧との共同脚本、笠智衆の父親役、原節子の娘役、ローポジションの独自の撮影スタイルなど「小津調」が完成され、娘の結婚と家族の関係は、その後、小津監督が多くの作品で描くテーマとなった。

③『麦秋』は、結婚適齢期を過ぎた娘の結婚を機に、老夫婦、兄夫婦と同居の大家族が離れ離れになっていく様子が描かれている。人も家族も変化し留まることはできず、小津監督は、この映画で輪廻というか無常というかそういうものを描きたいと語っている。

結局、私が選出した日本映画歴代ベスト3は、小津監督の「紀子三部作」となった。

①自分を都合よく見せようと嘘をつく人間の醜い部分をこれでもかと思いつけながらも、最後の百姓の行動で、やっぱり人間を信じてみようとするこの映画は素晴らしい。

②怒涛の青春物語。恋にも、大人になるにも障害がつきもの。それに対して、とにかく正面からぶち当たれ。1960年代の京都が舞台だが、いつの時代でも、どこであっても変わらない物語。ラストのイムジン河には涙が溢れ出た。

③このような初恋は未経験だが、果たして初恋の成就が幸せかどうか。男性と女性とでは初恋に対する思いは違うのか。登場人物はタカキとアカリ。この作品が作られる前に生まれた私の子供もタカキとアカリ。これは奇跡ではないだろうか。

小林竜雄 脚本家

①青春の殺人者

長谷川和彦 今村プロ・ATG 1976年

②初恋・地獄篇

羽仁進 ATG 1968年

③東京戦争戦後秘話

大島渚 創造社・ATG 1970年

私はアメリカン・ニューシネマとATG映画で映画への感性を磨いてきた。新宿にあった新宿文化と池袋の文藝地下、銀座の並木座は「私の大学」であった。

①既成の脚本のト書き「太郎、走る」といった書き方にずっと違和感があった。それがこの田村孟の脚本は「太郎は走る」となって小説風に書いてあった。これなら書けると初めて長編脚本に挑んだものだった。話は同世代の若者の切実な話で映画ではカットされたところも興味深く完成度は脚本の方があると思っっている。だが、若者が父母殺害の後、すぐ泣いて反省するのはどうか。頭が真っ白になっているだろう。これは何度も見ているうちに気づいたことだった。

②高校2年の時、新宿文化で見た。隠していた自分の恥部を覗かれたような衝撃があった。それから何度も見ている。心理カウンセラーが登場するのは初めてだろう。TBSで長く一緒に仕事をしたプロデューサーもこの作品に魅了されて封切り時に二度も見たと聞いていた。映画を作りたい

と思った作品であった。後にNHKの若者番組で発表した16ミリの短編映画の歌謡曲の入れ方はもろ羽仁演出の影響であった。

③脚本を佐々木守と書いた原正孝(のち将人)は一歳上の麻布高校を出たばかりだった。原の作った予告編が出色である。主演の後藤和夫は8ミリ映画を作っていた都立の竹早高校の高校生だった。私は後藤と同年で都立北園高生であったが、あの大島渚と一緒に映画を作ることができた彼らが眩しかった。彼らは私たちの世代の最初の表現者だった(後に原主導で後藤と私は映画雑誌を作った)。作品は若者の虚無を通して70年頃の空白感をよく描いていた。これを経なければ絶望感に満ちた『儀式』はなかっただろう。

①東京物語

小津安二郎 松竹 1953年

安井 文 謎の美女

②百円の恋

武正晴 SPOTTED PRODUCTIONS 2014年

③幕末太陽傳

川島雄三 日活 1957年

ベスト3の選出はなかなか難しい。悩んだ末にDVDを購入しており、折に触れて観ている作品を選びました。人間の多面性や一筋縄ではいかない関係・・・そういったものをこの三作品から、いつも学んでいると思います。

①復讐するは我にあり 今村昌平 松竹 1979年

②浮雲 成瀬巳喜男 東宝 1955年

③いつか読書する日 緒方明 スローラーナー 2005年

①主人公は、実在した連続殺人犯西口彰がモデル。映画では榎津巖（えのきづいわお）であるが、原作の佐木隆三はカポータイの『冷血』を意識して書いたという。榎津の緒方拳、父親の三国連太郎、母親のミヤコ蝶々、嫁の倍賞美津子の出来が素晴らしく、今村作品中でも特に傑作に数えられる出来栄である。ラストで父親が息子に会いに来るシーン。父親「ヌシにやワシを殺せん、ヌシはなんの恨みのなか人しか殺せん」、息子は父親の顔にくつつくばかりに近付け、腹の底から搾り出す声で「殺したか・あんたを・殺したか」近親憎悪の凄さが観るものを圧倒した。

②林芙美子の小説が原案であるが、水木洋子の脚本、成瀬巳喜男監督の三人で傑作となった。戦中、戦後の世相に翻弄されるゆき子（高峰秀子）と富岡憲吾（森雅之）の愛憎が哀れである。

③平凡な地方小都市の、平凡な日常的な恋のお話し。牛乳配達をしている50過ぎの大場美奈子（田中裕子）と、市役所に勤めている同級生の高梨槐多（岸部一徳）の秘めたる恋。現代の世相を嵌め込んで、健気に生きている市井の人を描いて佳作である。脚本家・青木研次の力がすがすがしい。

①浮雲 成瀬巳喜男 東宝 1955年

②幕末太陽傳 川島雄三 日活 1957年

③秋津温泉 吉田喜重 松竹 1962年

①初めて見たのは、半世紀ほど前。胸に焼けた鉄を押しあてられた気がした。怖くて、その後、見られなかったが、四十半ばで再度見て、やはり熱く焼けた鉄の塊を押し当てられた気がした。この映画を越える作品は出ないのではないかと思います。

②川島雄三監督作品は失敗作も含めてどれも好きですが、日活時代のものには失敗作はありません。日活最後の作品がこれ。文句なしのおもしろさ。若尾文子と組んだ大映作品もいいですね。娼婦や悪女ばかりやっている。

③「おめおめと、また秋津か」というセリフのおかげで、二十代と三十代を乗り切ることができました。川島監督が愛唱した「花に嵐のたとえもあるぞ。サヨナラだけが人生だ」のフレーズも、高校生の時にこの映画で知りました。ホントは井伏鱒二が漢詩を訳したのですが。

西松 優 日本映画研究者

①生きる

黒澤明 東宝 1952年

②七人の侍

黒澤明 東宝 1954年

③東京物語

小津安二郎 松竹 1953年

①は、「生きるとは何か」を私に強烈に突き付けた。会社生活で仕事に悩んでいた30代にこの映画に出会い、自分のその時の境遇・地点で自分の目標を設け、最大限努力することの大切さを教えられた。その後苦しい時には何度も見て、元気づけられた。今も私の心の糧で、恩人だ。

②・③は甲乙つけがたい日本映画の最高峰だ。②は骨太なストーリー、7人の人物造形の素晴らしさ、リアルな戦闘シーンの迫力が印象に残る。特に矜持・やさしさ・統率力を兼ね備えた勘兵衛、ストイックな剣の達人久蔵に魅力を感じる。

③は30代から何度も見ているが、見る年齢により寄り添う立ち位置が変わってきた。家族の変貌、親と子、夫婦、老いと死等を静的に冷静に描くが、心に鋭く突き刺さってくる。最後の周吉の姿に寂しさが滲み出ていて切ない。3本とも私が幼少期の作品だ。

私の青春時代以降の作品では、『砂の器』、『幸福の黄色いハンカチ』、『さびしんぼう』をあげたい。

藤田 明 映画評論家

①残菊物語

溝口健二 松竹 1939年

②限りなき前進

内田吐夢 日活 1937年

③妻は告白する

増村保造 大映 1961年

①は何回も見たが、京都の文化博物館では号泣寸前に。長回しも新鮮、献身の深い真実に突き当たった。英国のトップテンで名声が上昇した時期を思い起こす。

②の原案は小津安二郎。クビ同然のサラリーマンが発狂へ。1935年前後、社会的関心も並みではなかった小津の結語である。松竹に拒まれ、日中戦争行きで内田吐夢が引き継いだ。現存フィルムは欠損だらけながら、どの小津作品より珍重したい小津・内田の合作的逸品である。

③の初見は公開時、客もまばらな津の曙座。若尾文子を通しての戦後日本女性像に身の毛も…の感。同人誌に激賞の一文を記し、大映京都撮影所で本人に手渡したところ、「ぼくには初期の仕事もあって…」との反応。監督自身、照れていたのでは、と今にして思う。

水野圭次郎 菰野ふるさと映画塾OB

田中 忍 三重フェス会長

① **カンター！ティモール** 広田奈津子 自主作品 2012年

② **スケッチ・オブ・ミヤーク** 大西功一 太秦 2012年

③ **百日の恋** 武正晴 SPOTTED PRODUCTIONS 2014年

① 愛知生まれ、南山大学スペイン語科卒の広田奈津子さんの初監督作品。環太平洋の先住民族に関心を寄せていた監督が、東ティモールを訪れ、アレックスというギターの弾き語りをしている男性の歌に心を惹かれ、彼の歌にのせてその島の壮絶な歴史から独立後の現代までを映し出したドキュメンタリー映画。震災後の日本人の生き方にも参考になる映画です。

② アジア系のミュージシャンを数多くプロデュースした久保田麻琴が原案を出し、自ら沖縄の宮古諸島を訪れ、琉球民謡とは別の、神々への信仰や厳しい島の暮らしから生まれた「アーグ」「神歌」という極めてプリミティブな唄にスポットをあてたドキュメンタリー。宮古諸島の集落でひっそりと口承で歌い継がれて来たこれらの唄は時代の流れとともに受け継ぐ者が少なくなり、今、記録に留めておかないと消えてしまう貴重な伝統芸能なのです。

③ 32歳で引きこもりの自堕落な女がボクシングジムの前を通りかかり、ストイックなトレーニングをしている男に心を奪われ、ずっと負け犬だった自分の人生をひっくり返すために自らもボクシングを始め、のめり込んでいく姿を描いたもの。主人公の安藤サクラの変わりっぷりと新井浩文の淡々とした演技に惹き込まれ、人生誰でも本気になれば何とかかなるんだと思わせてくれる作品。

① **東京物語** 小津安二郎 松竹 1953年

② **砂の器** 野村芳太郎 松竹 1974年

③ **keiko** クロード・ガニオン ATG 1979年

独身の時、親になった時、そして父を亡くした時、①を観る機会があつた。それぞれ感動が異なつた。映画は普遍的な家族の表情を描き変わっていないのに……。変わったのは私自身だ。年を取り経験も増えたからだろう、思い入れをする部分が違つた。そして小津が亡くなつた年齢に私は近づいていく。

②のクライマックス、「ピアノと管弦楽のための組曲『宿命』」が流れるスクリーン。そこに映し出されるのは、日本の美しい四季。そして、住処を追い出され放浪する父と息子の親子の絆は生涯切れることはない切実に謳いあげた映像詩が素晴らしい。

大学生時代、撮影現場を見た③。少人数のスタッフで、怪しい外国人がカメラを構え、どこにでもいるお姉さんたちを撮影していた。映画を観たらビックリ！日常、生活する呼吸がスクリーンから聞こえてくる。演技をしていないと思わせる演出に脱帽し、いつまでもこの世界にいたかった。

①近松物語

溝口健二 大映 1954年

②七人の侍

黒澤 明 東宝 1954年

③たそがれ静兵衛

山田洋次 松竹 2002年

新世紀作品に、心動かされたものがほとんどないことに愕然とする。近年の作品を評価する能力と感性の衰退であればよいのだが。青年期に感銘を受けたものばかりが思い浮かぶ。思案のあげく時代劇を三本、序列なしで。『近松…』の舟の上の愛のシーンと、ラストの香川京子の毅然とした愛に殉ずる姿の気高さは忘れられない。『七人の侍』の、勝者は百姓だとの台詞が吐き出されるまでの全編の動感は、映画史上未踏のものであろう。『たそがれ…』は、江戸期の下級武士の貧しい生活をリアルに、しかし誇り高く描くことで、われら末裔もまた生きる力を分かち与えられる。以上三本では意を尽くせないで、次の七人七作を挙げる。小津安二郎『麦秋』、木下恵介『女の園』、熊井啓『海と毒薬』、小林正樹『人間の条件』、周防正行『それでもボクはやってない』、降旗康男『ホテル』、成瀬巳喜男『浮雲』。

①ここに泉あり

今井 正 独立映画・松竹 1955年 岸恵子

②浮雲

成瀬巳喜男 東宝 1955年 高峰秀子

③赤い天使

増村保造 大映 1966年 若尾文子

無理ムリ3本選んだが、「映画と女優」から3人の女優と自分の好みが自然と合ったのかと、並べてみてそう思った。私にとってほとんどの作品の主人公は女優である。

①は記憶を辿ってみると、幼少の頃 テレビなぞ電気店の客寄に（ある他）は珍しい時代だったと思う。その小さな画面に二十数人が釘付けになって、戦後十年ほどの巷の一角で耳と目を凝らしていた。地方の交響楽団員が山村を巡回演奏する。その裏での生活苦と団員のあつれきが画面に流れた。深く脳裏に刻まれたのは岸恵子のピアノと岡田英次がヴァイオリンで奏する「トロイメライ」だった。

②は十五年程前に初めて観て、淡々とした流れの中で光と闇が空気を伴って各ショットを浮かび上げて迫ってきた。最後の屋久島のシーンは湿潤さの中で、ゆき子が水葬されていくかのように自分の肌を感じた。出演数多い高峰だが最もきれいだ。

③白衣の天使が『赤い天使』となっている。作品にピタリとはまったタイトルだ。過酷な戦場で軍医は医者だが負傷者を治療出来ず始末するだけだ。その苦しさからモルヒネに頼り、救いようのない日々を送る。若尾演ずる看護婦「さくら」はその名の通り日本の桜であり、女だ。その本能的エロスで男達を包み、戦場にいる現実と戦う貴重な一本だ。

林 久登 スタッフ

① 竜馬暗殺 黒木和雄 ATG 1974年

② 青春の殺人者 長谷川和彦 今村プロ・ATG 1976年

③ 天城越え 三村晴彦 松竹 1983年

①は、私が映画にのめり込むきっかけになった作品。高い志を持った歴史上の人物も一皮むけば、ドジで女好きの男であったと喝破した黒木リアリズムに息を呑んだ。

②は超寡作の長谷川監督(ゴジさん)の処女作。母子相姦の匂う市原悦子と水谷豊のからみは衝撃だった。2014年にゴジさんの地元の広島国際映画祭が、約40年ぶりに彼に映画を作ってもらおうと立ち上がったと聞いたが、その後どうなっているんだろう。また、幻か？

③何といっても遊女役の田中裕子が素晴らしかった。身代わりとなった彼女が護送される小雨の中、その少年を見つけて振り返るショットは圧巻。

その他、自分の青春に重ね合わせて胸が震えた『八月の濡れた砂』(1971)。友人が殺人を犯して自首した夜、結婚式を挙げた2人が歌う「青い鳥」は泣かせた『遠雷』(1981)。三菱銀行襲撃事件を下敷きにした高橋伴明の傑作『TATTOO(刺青)あり』(1982)。澤井信一郎と荒井晴彦がタッグを組んだ劇中劇『Wの悲劇』(1984)。それに、友の裏切りを痛切に描いた金秀吉の『君は裸足の神を見たか』(1986)。さらには、是枝裕和の育児放棄を描いた『誰も知らない』(2004)。等、印象に残っている作品は多い。

堀川慶治 スタッフ

① 七人の侍 黒澤明 東宝 1954年

② 昭和残侠传 人斬り唐獅子 山下耕作 東映 1969年

③ 生きる 黒澤明 東宝 1952年

大学2年の時初めてのロードショーで『荒野の七人』を観て感動し、原作の①を観た。衝撃の力作まさに完璧な映画である。この映画を観る迄、話題作であるとか、まあ情性で映画を観ていたと思い知らされた。どこの国の人にも感動を与えることのできる、普遍性を持つ作品こそが、傑作の名に値するのだ、と。それ以降の映画・文学・音楽などへの向き合い方を変えた作品である。

②は所謂ヤクザ映画。何故か好きで殆ど全作品を観ている。その中で、世界に通用する作品は、と考えた時この映画こそと感動した。この作品で、それまで大根役者と思っていた高倉健が名優であると確信した。彼は役を演じているのでは無く、役の人物(花田秀次郎)になりきっていたのである。脚本は長田紀生。後に彼の妹であることが、結婚を決意する後押しをしたのは間違い無い。

大学4年の秋、就職先に悩んでいた時に③を観た。内定中の田舎の役場か、超一流メーカーか。当時役場は給料がその会社の3分の2しかなかった上、所謂お役所仕事と称され、仕事もツマラナイと思われていた。田舎の役場でも、やり方次第で良い仕事ができる、と決断の後押ししてくれた作品である。

村上 暁 スタッフ

①機動戦士ガンダムⅢめぐりあい宇宙編 富野喜幸 松竹 1982年

②この空の花 長岡花火物語

大林宣彦 PSC、TMエンタテインメント 2011年

③アウトレイジ 北野武 W・B映画、オフィス北野 2010年

①小学生だった僕は、寒い中、映画館の前の長蛇の列に加わった。「映画館でガンダムが見たい！」。こんなに見たい映画は初めてだった。

劇場版三部作の三作目。岩井俊二監督をして、「国宝級のシナリオ」と絶賛させた物語。名セリフの数々、少年兵たちの成長、葛藤、そしてラブストーリー。

②大林宣彦監督の映画から1本。天才大林ワールド満載。全編涙、また涙。映画館で見られなかったことが残念…。いつか大スクリーンで見たい。

その他選ぶとしたら『野のなななのか』『さびしんぼう』『青春デンデケデケデケ』『理由』『時をかける少女』。

③北野武監督の映画から1本。暴力描写の中で、時々クスツと笑える部分が魅力的。

他の作品で好きなものは、『その男、凶暴につき』『ソナチネ』『キッズリターン』『HANA・BI』『Dolls』『Brother』。

森 次男 スタッフ

①七人の侍

黒澤明 東宝 1954年

②砂の器

野村芳太郎 松竹 1974年

③仁義なき戦い

深作欣二 東映 1973年

①は、モノクロ映画ながらエンターテイメントや、アクションの映像表現に多大なる革命を起した。私は、この映画があったからこそ、映画好きになれたと思う。カメラワークは勿論だが、侍たちのキャラクターも丁寧に描かれており、特に宮口誠二が演じた沈着冷静な侍が好きだ。

②は、「差別」という重いテーマをドラマの中核に捉えながら娯楽作品として見事に描かれた点。特に丹波哲郎が演じるベテラン刑事と、父親役の加藤嘉の鬼気迫る演技に引き込まれ、テーマ曲「宿命」を聴くたびに映像が甦る。1970年代を代表する社会派ミステリーの超傑作だと思う。

③は、正義と悪を根底から覆し、ワルが主役に回る実録現代ヤクザ映画。「深作欣二」という映画監督の名を鮮烈に覚えた作品である。